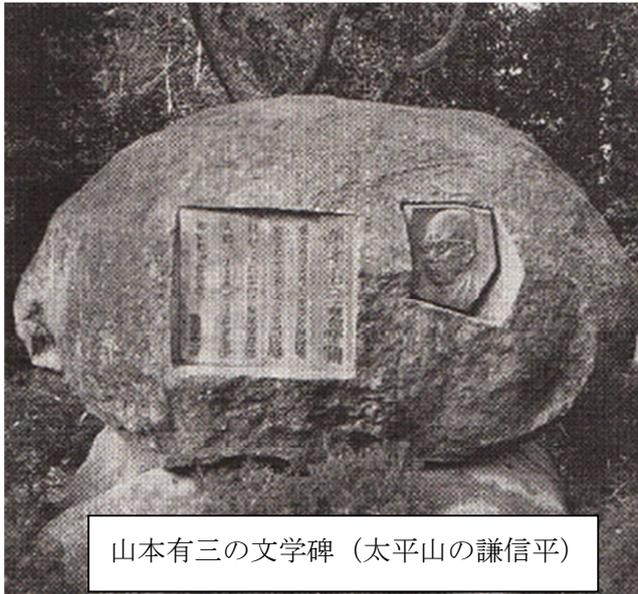


やまもとゆうぞう
山本有三



山本有三の文学碑（太平山の謙信平）

みなさんは、左の文学碑を見
たことがありますか。これは、
太平山の謙信平にある山本
有三の文学碑で、彼の代表作
『路傍の石』の中の一節「たっ
たひとりしかない自分を、たっ
た一度しかない一生を、本当に

生かさなかったら、人間、うまれてきたかいがないじゃないか。」の
一文がきざまれています。

郷土の偉人、文豪として知られる山本有三とは、いったいどんな
人物だったのでしょうか。その生涯と栃木市の関係をのぞいてみま
しょう。

[有三と郷土栃木]

有三は、1887（明治20）年7月27日、父元吉、母ナカの
長男として栃木町に生まれ、勇造と名づけられました。父の元吉は、
元宇都宮藩の武士で、明治維新ののち栃木に移り住み、大通りで

呉服商を営んでいました。父は教育熱心で、1892（明治25）



年、栃木町に初めてできた私立の幼稚園に通わせたり、

漢学塾にも通わせました。

1894（明治27）年、栃

木尋常小学校（現在の栃木第一小）に入学し、1902（明治35）年に栃木高等小学校を卒業

しました。その間の学業成績は、大変優秀でした。有三は、少年時代をこの栃木市ですごし、

巴波川や綿着山などで級友と遊んでいたようです。しかし有三は、高等小



学校を卒業すると、呉服屋の跡継ぎ

に育てようという父の考えで、浅草（東京都）の呉服店に奉公に出されました。中学に進学し、学問をした

いと考えていた有三は、奉公先でも商人にはなじめず、一生たらずでまた栃木に戻ってきました。

そして、ようやく、1905（明治38）年、有三が18歳のとき、上京して神田の正則英語学校に入学、東京中学校、第一高等学

校に入学、東京中学校、第一高等学

校、東京帝国大学（現在の東京大学）をへて、劇作家の道を歩みはじめました。『穴』『生命の冠』^{にょにんあいし}『女人哀詞』^{こめひゃっぴょう}『米百俵』などの有名な戯曲と『女の一生』^{しんじついちろ}『真実一路』^{ろぼう}『路傍の石』など、優れた小説を残しました。

有三は、作家としてはもちろんですが、子供たちによい読み物を与えようと、1935（昭和10）年『日本少国民文庫』を編集し、刊行しました。また、1943（昭和18）年、有三の住む三鷹^{みたか}（東京都）に、「ミタカ少年国民文庫」を開き、子供たちに開放しました。さらに、戦後まもない、1946（昭和21）年に、少年少女雑誌『銀河』を発行し、未来を担う子供たちに世界を、人類を、宇宙を見る大きな目と広い志を期待しました。

その後有三は、参議院議員として、国語の表記や文化財の保護の問題などに力をそそぎました。そして、1956（昭和40）年、文化勲章^{くんしょう}を授与されました。

栃木市では、1960（昭和35）年、市ではじめての栃木市名誉^{めいよ}市民に有三を選びました。劇作家^{げきさっか}として、小説家として、教育者として、さらには、政治家として戦中、戦後の日本文化に大きな業績を残した有三は、1974（昭和49）年1月11日、深い眠りに

つきました。

有三のお墓は、万^{よろすちよう} 町^{きんりゆうじ} の近竜寺にあります。毎年有三の命日には、山本有三記念会の人々によって、「^{いちいちいちき}一忌」が開かれ、有三の意志を受けつぎ、広く人に理解してもらおうと活動が続けられています。

みなさんも、ぜひ有三のお墓を訪ねてみてください。その墓石には、「動くもの ^{くだ} 砕けるものの中に 動かないもの ^{くだ} 砕けないものが大きく体に伝わってくる」とほってあります。

(「栃木市のあゆみ」栃木市教育委員会から)



近竜寺にある山本有三の墓